

## 【序文】ラテンアメリカと移民——日本，スペインからの視点

### 【Prólogo】 Las migraciones internacionales y Latinoamérica: Desde los puntos de vista de Japón y España

福田友子

FUKUDA Tomoko

#### 1. 本報告書のねらい

2014年度、「ラテンアメリカと移民」というテーマで1年間の研究プロジェクトを立ち上げ、共同研究を行った。本報告書は、このプロジェクト所属メンバーらの研究成果をまとめたものである。参加者の学問領域は、言語教育学（仲江）、歴史学（辻）、社会学（酒井、福田）と多様であるが、参加者全員が「ラテンアメリカと移民」に関心を持つことから、それぞれの立場で本研究テーマに取り組むことで新たな知見を見出だすことができると考えた。

#### 2. ラテンアメリカと移民

ラテンアメリカは、ヨーロッパ人がアメリカ大陸に到達して以来の移民受け入れ地域であった。それゆえ、ラテンアメリカにおける「人の国際移動」<sup>1)</sup> (migrante, migración) といえば、ヨーロッパ系植民者、アフリカ系奴隷、日本人を含むアジア系移民労働者などの「流入移民」(inmigrante, inmigración) が主流であった。ところが第二次世界大戦後の1950年代から、ラテンアメリカは移民送り出し地域へと立場を逆転させた。この新たな「送出移民」(emigrante, emigración) は、他国に経済的機会を求めると同時に、自国の政情不安から身を遠ざける目的を持つものであった (Parnwell 1993=1996: 52)。

送出移民の行き先も、当初は近隣の中進国（例えばベネズエラ、アルゼンチン、メキシコ）への域内移動、もしくは米国への大陸内移動がほとんどであった。もともとアメリカ大陸内の「人の国際移動」は、国内移動(migración interna)と国際移動(migración internacional)とが連続しており、両者は分けて考えにくいものであった(清水 1992: 362)。このことが、ラテンアメリカ域内移動やアメリカ大陸内移動が盛んにおこなわれた背景にあると考えられる。

ところが1980年代以降、その移動はスペイン、イタリアなどのヨーロッパ諸国、そして日本への大陸間移動へと拡大した。この移動範囲拡大のきっかけとなったのが、ラテンアメリカがかつて受け入れた移民の、母国・祖国への「帰還型移動(return migration)」であった。藤崎(1991: 48)によると、イタリア、ドイツ、スペインでは、それぞれの国の移住者の子孫であることを証明する書類を在外公館に提出することにより、比較的簡単に国籍が与えられ、二重国籍が認められ、母国でその国民として就労ができるという。たとえばイタ

リアでは、父系三代、母系二代まで国籍取得が可能である。ドイツでは、世代に制限なく国籍取得が可能である。スペインでは、父母どちらかがスペイン人であれば、世代に関係なく国籍取得が可能であるという。

ブラジル、ペルー、アルゼンチン、ボリビアといったラテンアメリカ諸国（コロンビアを除く）から日本への「人の移動」のきっかけもまた「帰還型移民」であった。つまり、1980年代以降に日本で注目を集めた、日系南米人の日本「デカセギ」ブームは、ラテンアメリカを起点とする「人の国際移動」の世界的潮流の一形態としてとらえることができる。

ところが日本政府は、このラテンアメリカからの「帰還型移民」、つまり日系人を「特別な形態の移住労働者として、法的に「優遇」受け入れした（野島 1989: 98-9）。その結果、日系人はそれまで他の移住労働者が水面下で経験してきた、労働問題、社会保障問題、医療問題、教育問題、住宅問題等の矛盾を、一気に公的領域へ引き上げるという皮肉な役割を果たすことになった（渡辺 1995: 43-51）。それと同時に、移住労働者内部において、日系人を頂点とした階層化が現れたとも言われている（稲上ほか 1992: 17-24）。しかしながら「日系人」として日本に滞在しているラテンアメリカ人は、本当に特別な形態の「優遇」された移住労働者であり、移住労働者内部の階層化の頂点に位置してきたのであろうか。

本報告書は、「ラテンアメリカと移民」の社会的背景とその実情を、「帰還型移民」を優先的に受け入れるという共通する経験を持つ日本とスペインの視点から把握することを目指すものである。

### 3. 日本、スペインからの視点

本報告書に収録された4本の論文のうち、前半の2本はスペイン、後半の2本は日本に「拠点」をおく／おいていた研究者の視点から見た、ラテンアメリカ出身移民と彼ら／彼女らを取り巻く社会的状況に関する論文である。

まず前半の「スペインからの視点」について紹介したい。現代スペインの「流入移民」を専門とする研究者は、日本にはほとんどいない。したがって、このテーマに関する論文をこれまで日本語で発表してきたのは、主にスペイン地域研究者であり、その刊行時期も2000年代以降と比較的最近のことである。それもあって、スペイン国内のラテンアメリカ移民に注目する研究は、日本ではまだほとんど紹介されていない。そこで本共同研究では、現代スペインの社会問題と在日ラテンアメリカ移民の社会的状況の双方に関心を持つ2人の研究者が、それぞれの専門分野や研究関心から事象を分析した。現代スペインの移民をめぐる動向について日本語で情報提供されること自体が貴重な成果であると言えよう。

後半の「日本からの視点」についても触れておこう。前半のスペインの移民問題に比べると、後半の在日ラテンアメリカ人研究は、日本ではある程度まで研究蓄積が進んできたテーマであると言えよう。とはいえ日本の状況をラテンアメリカ側の文脈に結び付けて論じる研究はまだ十分とはいえない。本共同研究は、在日ラテンアメリカ人の中でも、比較的注目

されてこなかったペルー人に焦点を当てているのが特徴である。ペルーの社会問題と日本の移民研究の双方に関心を持つ 2 人の研究者が、それぞれの専門分野や研究関心から分析を加えた。

#### **4. 各論文の位置づけ**

以下、本報告書に収録した各論文とその位置づけについて紹介する。

##### **4.1 辻論文**

辻は歴史学が専門で、近代スペインからアルゼンチンに渡った移民について歴史学的に研究した経験を持つ。特に 1880 年代～1930 年代の「大量移民の時代」と、その時代の最大の特徴である「還流型移民」（スペインとラテンアメリカを何度も往還する移民）に詳しい。また現代スペイン社会における移民問題にも関心を持ち、ラテンアメリカ、アフリカ、アジア出身者等、多様な移民を包含する複雑な社会的状況に関心を持ち続けてきた（辻 2009）。今回はそうした研究関心をふまえ、歴史学的な知見を現代の移民の問題につなげて考えるという研究アプローチを提示している。スペイン近現代史や法制度に関する専門用語が多く含まれる論考であるが、問題の本質はスペインにも日本にも共通する。

##### **4.2 酒井論文**

酒井は社会学が専門で、研究領域はメディア研究およびライフストーリー研究（酒井 2006）である。特に在日ブラジル人をはじめとするラテンアメリカ人移民のコミュニティ調査において、こうした研究手法を用いた分析を積み重ねてきた（酒井 2008a; 2008b; 2011）。また近年はスペイン現代社会に関するメディア研究およびライフストーリー研究にも関心領域を広げつつある。今回はそうした研究関心をふまえ、現代スペイン社会が抱えるラテンアメリカ移民をめぐる問題、特に「若者」の問題を「社会的構築」という概念を用いて分析を加えている。また今回の論考は、予備的考察と位置付けられていることから、同テーマでの研究の深化が今後も期待され、その第一歩としても注目される。

##### **4.3 仲江論文**

仲江は言語教育が専門で、特に移民の子どもたちの継承語やバイリンガル教育に関心を持つ。在日ラテンアメリカ人の子どもたちの教育問題に詳しく、日本語指導員（スペイン語担当）として小中学校の現場を見てきた経験を持つ（仲江 2012）。また 2013 年にはペルーのリマ市で、日本からペルーに帰国した子どもたちの言語教育に関する現地調査を実施した。在日外国籍児童・生徒に対する言語教育においては、日本の学校教育に適応できるだけの日本語能力の習得だけが目標にされがちであるが、トランスナショナルな環境下にある移民の子どもたちの将来を考えた場合、母語保障の方がより重要であると仲江は指摘する。

今回はそうした研究関心をふまえ、2013年のペルー調査の結果を紹介しながら、移民の子どもたちの言語教育について問題提起する。

#### 4.4 福田論文

福田は社会学が専門で、研究領域は国際社会学および移民研究である。パキスタン人をはじめとするムスリム移民のコミュニティ形成に関心を持ち、近年はエスニック・ビジネスの研究や移民の宗教活動の研究などを続けている。またラテンアメリカ移民の研究にも関心を持ち、1990年代後半に神奈川県内で滞日ペルー人を中心とする移住労働者の調査を実施した経験を持つ(福田 2002)。また2000年代中盤には神奈川県横浜市鶴見区や川崎市川崎区における流入労働者のコミュニティ形成についても研究している(福田 2009)。今回は基礎的な人口統計データの分析を通じて在日ペルー人コミュニティの現状を捉え、その特徴について検討している。

本共同研究に参加した4名の研究者に共通する特徴は、トランスナショナル(脱国家的、超国家的)な視点——Portes (2010: 195)の言う「トランスナショナリズム」というレンズ——を重視している点である。現代の移民は、一度移住したとしても、移住先にそのまま永住するわけではない。航空技術や通信技術の発達に伴い、移住後も出身社会とのつながりを保ち続けることができるし、出身社会と移住先を往還しながら生活することもできる。より良い移住先が見つければ、次の場所へと移住を繰り返す。こうした越境的な社会的領域の生成やそこにおける事象を説明するのが「トランスナショナリズム論」である。「トランスナショナリズム論」は、脱国家的、超国家的な社会領域の肯定的な側面ばかりに注目しがちであると批判を受けることがあるが、現状はもちろん肯定的なことばかりではない(Guarnizo and Smith 1998: 4)。たとえば移民は、そのタイミングで最善の居住地を選択するため、一緒に移住する家族移民にとっては、長期的なビジョンを持つことが難しい、という困難な側面もある。

本共同研究に参加した4名の研究者は、それぞれのトランスナショナルな立ち位置(日本に拠点をもつが、スペインやラテンアメリカに滞在したことがある/現地調査した経験を持つ)を活かしつつ、それぞれの研究領域から事象を検討している。

#### 注

1) 「移民」および「人の国際移動」の定義については、福田(2014: 1-2)を参照のこと。

#### 文献

藤崎康夫, 1991, 『出稼ぎ日系外国人労働者』明石書店。

福田友子, 2002, 「国家による成員の選別過程——1990年入管法改定と『日系人』を事例と

- して」『社会学論考』23: 31-56.
- , 2009, 「流入労働者たちの系譜——沖縄出身者, 在日コリアン, 日系ラテンアメリカ人の集住地域としての鶴見」玉野和志・浅川達人編『東京大都市圏の空間形成とコミュニティ』古今書院: 171-94.
- , 2014, 「国際移動と移民の社会的影響」福田友子編『国際移動と移民の社会的影響』千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 282: 1-5.
- Guarnizo, Luis Eduardo and, Michael Peter Smith, 1998, “The Locations of Transnationalism,” Michael Peter Smith and Luis Eduardo Guarnizo eds., *Transnationalism from Below*, Transaction Publishers: 3-34.
- 稲上毅・桑原靖夫・国民金融公庫総合研究所, 1992, 『外国人労働者を戦力化する中小企業』中小企業リサーチセンター.
- 野島年彦, 1989, 「進めたい日系人の特別受け入れ」自由民主党『月刊自由民主』1989年11月号: 92-9.
- 仲江千鶴, 2012, 「学校における日本語を母語としない子どもたちへの支援——船橋市の取り組み」房総日本語ボランティアネットワーク編『千葉における多文化共生のまちづくり』エイデル研究所: 196-201.
- Parnwell, Mike, 1993, *Population Movements and the Third World*, Routledge, London.  
(=パーンウェル著, 古賀正則監訳, 1996『第三世界と人口移動』古今書院.)
- Portes, Alejandro, 2010, *Economic Sociology: A Systematic Inquiry*, Princeton University Press, Princeton.
- 酒井アルベルト, 2011, 「『共存』を試みた団地の人々——千葉県南米日系人集住団地」『建築雑誌』126(1619): 24-5.
- , 2008a, 『日本における南米出身者のコミュニティ形成——ライフストーリーとメディア言説からみた「デカセギ」経験を中心として』千葉大学大学院提出博士論文。
- , 2008b, 「在日南米コミュニティにおけるシンボル化された言語——ライフストーリーとエスニック・メディアの言説から」『日本オーラル・ヒストリー研究』4: 85-105.
- , 2006, 「ケン・プラマーにおけるライフストーリー調査法のメディア研究への応用可能性——初期オーディエンス・エスノグラフィーとの関連性からみた認識論的・方法論的考察」『千葉大学社会文化科学研究』12: 191-200.
- 清水透, 1992, 「都市的秩序の崩壊——メキシコにおける都市の<インディオ化>」伊豫谷登士翁・梶田孝道編『外国人労働者論——現状から理論へ』弘文堂: 333-64.
- 辻博子, 2009, 「スペインにおける外国人への言語教育——EPA P.F.の役割についての一考察, ビトリアーガスティス市の事例と今後の課題」『福岡大学言語教育研究センター紀要』8: 49-62.
- 渡辺雅子編, 1995, 『共同研究出稼ぎ日系ブラジル人 論文篇』明石書店.